



宇宙する人生 東京大学最終講義

須藤 靖 著

日本評論社 四六判 264頁 本体1,700円＋税

読み物
お薦め度
5
☆☆☆☆☆

「私はしばしば宇宙物理学を『宇宙を学び世界を問う』営みであると形容することがあります。」この一文から始まる本書は、東京大学宇宙理論研究室を長年率いてきた須藤靖氏の最終講義をもとに、大幅に加筆されたものである。タイトルの「宇宙する人生」からわかるように、宇宙の研究のみならず、須藤氏の宇宙を学び世界を問う営みが生き生きと描かれている。

本書は、須藤氏が生まれ育った太平洋が見える高知の町から始まる。太陽を赤く描かなければならないことにまったく納得できなかった保育園児の須藤少年は、高知の小学校・中学校・高校を経て、東京の大学で物理学を学ぶ。大学院修士課程では重力波の実験的検出の研究を行い、博士課程からは専門分野を変えて宇宙論の研究を志す。学位取得後のアメリカでのポスドク生活、茨城大学、広島大学、基礎物理学研究所での若手教員時代の日々を経て、東京大学で研究室を率い現在に至るまでの、須藤氏の研究活動や研究者の日常、さらには宇宙物理学者の視点から見た日本の社会・教育・文化などの変遷までが描かれている。

良い本は、読み手のその時々状況によって豊かに表情を変えられている。天文月報の読者のみなさんは、幅広い年齢層の様々なバックグラウンドの方がいると思うが、多かれ少なかれ各自が自分の「宇宙する人生」を歩んでいることだろう。みなさんそれぞれの宇宙する人生によって、本書は様々な読み方があるだろう。

宇宙に興味がありながらも大学受験を控えて将

来の進路選択に迷う中高生の方であれば、須藤氏の高知での中高生時代に共感が持てるかもしれない。また、本書の8章にある、須藤氏が東京大学新聞社に「東大受験生へのメッセージ：物理」という文章を依頼されて寄稿した「謎解きはジューケンの後で」をぜひ読んでほしい。高校物理の先には、魅力的な物理がみなさんを待ち構えているのである。宇宙に興味はあったが高校物理が嫌になり進路選択に迷い、理系をやめた高校時代の筆者に読ませたかった文章である。

これから研究を志す大学生の方には、初めて宇宙の研究に取り組み論文を執筆していく大学院生時代の研究活動が面白いかもしれない。2章には、博士課程に進むか迷っている皆さんへの文章もあるので、ぜひ読んでほしい。

大学院生やポスドクの方は、須藤氏がどのように共同研究者に出会い、新しい研究分野に飛び込み研究ネットワークを広げていったかが興味深いかもしれないし、大学教員の方は、須藤氏が若い大学院生と研究を進めていくエピソードが面白いかもしれない。研究者でない方には、研究者が日々どのように生きているのかという研究者（須藤氏）の日常や、研究の楽しさ、研究が生まれる現場の空気感を味わってほしい。

天文月報の読者のみなさんの数だけある「宇宙する人生」。そのおともとして、ぜひ本書をライブラリに加え、たまに読み返してほしい。きっと、その時々で新しい表情をみせてくれるはずである。

藤澤幸太郎（工学院大学）